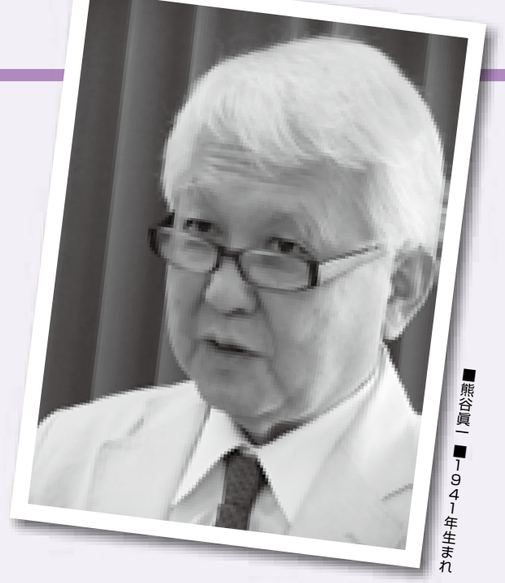
熊谷（くまがい） 眞一（しんいち）氏に聞く！

Interview with Shinichi Kumagai

株式会社シベール代表取締役社長



■熊谷眞一　■1941年生まれ

ラスクをはじめおいしいお菓子のお店やレストランの社長さん。それだけではなく近年、劇場や図書館まで造ってしまった。いったい、どんなことを思い描いている方なのだろう。人間としての熊谷眞一氏の頭の中を覗かせていただいた。

生い立ち、そして起業

大江町の菓子屋の長男に生まれ、大きくなったらこの店の跡継ぎだと祖母の膝の上で言われていますから、ダントツの町一番のお菓子屋になろうと思っていました。11歳の時先生に「お菓子屋になるのはもったいない。」と言われ、「お菓子屋というのはその程度にしかみられていないのか。」と非常に腹が立って、「お前が何とかしろ」お菓子屋という職業が私を選んだと思ったのです。町一番になることはその答えになっていないと、うつうつとしていた時期もあります。それで「お菓子を産業にしたい。産業にするには山形で。」と起業しました。25歳の秋でした。

祖父、祖母、父、母の話

私が子供の時、祖父は毎朝経を唱えていました。それを枕元で聞きながら育ちました。祖母は膝の上で「おまえほど賢い子供はいない。」と繰り返し言ってくれました。

普段は締まり屋の父ですが、私が病気で生死の境をさまよっている時、私が眠っていると思ったのでしょう、「高価な薬があるけど、どうされますか。」と医者が聞くと「それを使ってください。」と即答してくれました。母は本も全然読んだ事がないし、人前で話すなんてこともしない。でもものすごく賢いひとでした。言った事はただひとつ、「おてんとう様が見ている。」私という人間を見抜いていたんですね。非常に反骨精神のかたまり。同時に好奇心もある。だからまかり間違えば…と思ったのかもしれません。

希望とその応援団

希望というものは他から与えられるものでなく、自分が見たところが明るくなるヘッドランプだと思っています。

わたしが25歳の時、今の常識で考えるとどんな希望がありましたか。何もないですよ。いつ潰れるかって言われてたんだから。山形みたいな大都市でもないところで洋菓子だけでやっていける訳がないと。

でも希望はヘッドランプだから。自分が行った所が明るくなっていくんです。明るいから希望ではなくて、希望の灯を向けたところが明るくなるのです。

そして希望の応援団は「怒り」「悲しみ」「恐怖心」そして「飢餓」なんです。みんな逆に考えています。シベールという店名は映画の「シベールの日曜日」からとりました。何故ならこの映画の中には社会の不条理に対する「怒り」「悲しみ」「恐怖心」があふれていたからです。

「地方であることは個性の相違であって、けして水準の差であってはならない」とA3の紙に書いて店の奥の誰にも見えないところに貼ったこともありました。

教育　若者にアドバイスは

これまでの学力の定義は知識を蓄えることでした。そんなものは今十万円のパソコンにかないませんよ。「考える」力を教わっていないから「考えろ」と言われると変てこなことを考える。テストがあったら一番簡単な所から書きなさいというでしょう。良い点数をとるには簡単な所から答えるという教育を受けてきた。困難なものを後回しにする。ところが世の中では百点のうち九十点が困難な問題を解くというところにあるんです。それが考える力、すなわち学力です。

坂の上から底にいって登りかえそうとしたときの教育をやっていないんです。

若者にはアントレプレナー（起業家）になろうよと言いたい。そして日本を変えるのはドン・キホーテだと思います。ドン・キホーテというのは未熟な理想主義者です。若者にはしなやかでしたたかで戦略的なドン・キホーテになって欲しいと思います。

公益と私益について

公益を辞書でひくと矢印があって私益とでています。正反対なものととらえている。しかし私たちは社会資本というものに囲まれて暮らしています。これは私益からうまれるんですね。税金ですから。一番の公益は税金を払うということなんですよ。うちの会社の理念にも書いてあるけれど「美しい利益を計上して税金を納める」つまり私益が分母で公益が分子。酒田の本間光丘*という人は日本一の大地主にして私益から公益を生み出した人でしょう。財閥にして藩の経営コンサルタントにして金融機関にして貿易会社。もっと彼のことを研究してほしいです。

男女共同参画社会について

男女共同参画社会と言いますけど、けして同化することがいいことだとは思いません。やはり役割の違いがありますから。私はいくら頑張っても子供は産めない。私は家の中では男女共同参画失敗者です。起業して3年後に結婚しましたが、私はお菓子を産業にしたいと思っていましたから「私と結婚すると苦労が多いよ。」と言ったつもりですが。（笑）

子供たちは仕事第一という中で、極端な話、親の背中をみるどころか母の背中にくくり付けられて一緒に仕事をしながら育ってます。でもうちの奥さんなかなか大きな人で小さい人だったら別れていますよ。

井上ひさしさんのこと アリーナ（劇場、時には体育館になる）と図書館のこと

七日町に劇場を造る計画はだめになりましたがその時、先生とお会いしました。ここ蔵王松ケ丘にいらした時、蔵王や月山が見える環境の中で、レストランに三世代のお客様がいっしょに食事をしているのをご覧になって「ここにしましょう。」とおっしゃいました。昨年オープンし、レベルの高い演目を上演しています。会員の3分の1は県外の方です。興味があってどうしようかなと思ったら迷わず観てください。

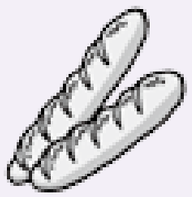
自分をデザインするということ

みんなね、自分をデザインするデザイナーなんですよ。私は11歳の時から、自分をどうデザインしたらいいんだろうと考えていました。だから宮沢賢治の詩「春と修羅」の序の出だし「私という現象は…」を読んだ時は感動して「おっぉぉぉ。」と声を上げてぐるぐる部屋をまわったものです。

最初の頃は「カミソリのような切れ味を」と思っていました。そのうちカミソリではたいしたものは切れないから肥後の守（小刀の一種）になろうとしました。次はナタ。次は丸太棒。その次は漬物石。どかっと乗っかっていると味がよくなっていきますから。最後には酵母になりたい。酵母とはフランスパンなどをふわっとさせるものですね。でも最後には消えるんです。パンの中に残ると（酵母臭という）あまりおいしいパンにならない。役割が終わったら消えていくというのが酵母ですからそれになろうと思っているのです。フランスパンにはクープという切り込みをかみそりでいれるんです。これはね、酵母の花道なんです。フランスパンって焼きあがるとパチパチパチと音がするんです。「今日の私はこんなにいい出来だよ。」って自慢しながら「皆さん、いいお仕事をしてくださってありがとう。」と感謝して拍手をする。おもしろいでしょう。

母が言った事はただひとつ、「おてんとう様が見ている。」

（インタビューの抜粋）



山形市のコミュニティファンド（市民活動支援基金）にシベールさんから山形市の文化芸術支援金の申し出があった。昨年支援を受けてミュージックフェスティバル・イン・山形を主催したマーチングバンド「マウンテンアッシュ」の代表荒川さんは「いままでやりたくても出来なかったことができた。」と答えてくれた。熊谷さんはまさしく文化というフランスパンをおいしく焼きあげる酵母に、もはやなりつつあるのではないだろうか。

取材を終えて

「くやしいー。」とか「どうしてこうなるんだ。」など怒りや悲しみは避けて通ったり無関心を装ったりしがちだが、この思いにじっくり向き合いそれをも前進のエネルギーに変えてきた人、それが熊谷眞一氏であると感じた。そしてその道しるべは「おてんとう様が見ている。」という母の教えなのかもしれない。

自分をデザインするのは自分。私も未来の自分をデザインしてみようと思う。（編集協力員　布施木洋子）

＊本間光丘（ほんま みつおか）／江戸時代の酒田の商人。「本間様には及びもないが、せめてなりたや殿様に」と言われた。